

〔目的〕味の感受性はKiesawの研究以来、舌の部位によって異なり、舌体の後部背面は苦味、舌尖部は甘味、外側縁は酸味、舌全面は塩味に対して感じるといわれている。これを再確認するために、4基本味に対する味覚感度を調べた。それと共に、月経周期と味覚感度の関係及び味覚と関連する唾液の日内変動について調べた。

〔方法〕1. 月経周期に伴う基礎体温の測定：被験者は、21～22歳の女子大生12名に2～5カ月測定してもらった。測定は、毎朝決まった時間に約5分間、口中婦人体温計を使用して行った。2. 味覚感度の測定：測定時間は、食後3時間以降とし、方法はディスク法を用いた。測定部位は、舌尖部から舌体部にかけて7カ所とした。3. 唾液の分泌量、pH、アミラーゼ活性及び蛋白量の測定：基礎体温パターンの正常な被験者について唾液の採取を行った。採取時間は9～20時の12時間行った。方法は、1時間毎に5分間の唾液を口に溜めた後、吐き出してもらって集め、それぞれの量、pH、アミラーゼ活性、蛋白量を測定した。

〔結果〕1. 正常な基礎体温パターンを示す女子大生は半数以下で、安定していない人が多いことが分かった。2. 4基本味に対する味覚感度は、全て舌尖部において鋭敏であった。そのうち、甘味と酸味については、月経周期によって感度が異なることが分かった。3. 唾液分泌量は、食後有意に増加したが、食間についても、朝から夜になるにつれて徐々に増加した。又、唾液のpH、アミラーゼ活性及び蛋白量も日内変動していることが分かった。